



危機管理・くらし安心局

佐藤 紀子 くらし安心課長

昭和 61 年度入庁。
議会議務局議事調査課政策調査室室長補佐
生活文化課副主幹
企画調整課副主幹
村山総合支庁子ども家庭支援課長
秘書広報課広報室長を歴任後、
平成 28 年度から現職。

趣味の時間も大切にしていられる佐藤課長。
ご自分でお菓子を手作りするそうです。プライベートの写真では、自宅でティータイムを楽しむ様子の写真(3頁)を提供していただきました。

仕事を始めた頃は…

就職活動をしていた当時は、男女雇用機会均等法もなく、一般的に「女性は補助的業務を行うのが当たり前」という時代でした。男性と女性で採用区分が分かれていることもありましたが、「女性は募集なし」ということや、職場へ自宅から通える女性しか採用しないというところもありました。採用試験のための資料を請求しても、「女性だから」という理由で音沙汰無しということも平気でありましたね。そういった中で、公務員試験は平等だったということが、この仕事を選択した理由の1つでした。また、ずっと公立の学校で学んできたということもあり、公の機関で働くことで「恩返し」ができたという気持ちもありました。

採用されて最初の配属先は最上の出納課で、主な業務は伝票の計算でした。毎日電卓で計算する日々…。電卓のブラインドタッチもできるようになりました。

今は、女性職員も様々な業務を担当していますが、その頃は、女性の業務といったら庶務が中心で、自分の名刺もありませんでした。大学までは、ほとんど男性と女性の扱いについて差を感じる機会は無かったのですが、仕事をするようになって男性との扱いの差を感じ、悶々としていた部分もありましたね。4年目で初めて本庁での勤務となりましたが、主事の時期は補助的な業務に従事することが多かったと思います。

「女性で初めて」という業務を担当することも…

◎ 女性職員で初めての委員会書記に

主査級で議会議務局に配属された際は、女性として初めて委員会の書記になりました。書記は議員の方と一緒に委員会に出席したり視察に行ったりするのですが、仕事において、議員の方は女性でも男性でも平等に接してくれました。議会議務局には2回お世話になりましたが、職員として新たな出発ができた「第2のふるさと」という印象をもっています。思い切って配属してくださった方々にも本当に感謝しています。

◎ 相手に伝わる「文章力」を～県民相談室～

県民相談室に勤務していた4年間は、県民の方々からの声を直に聞き、お答えするという仕事だったので、どういうふうに話したり書いたりすると、きちんと相手に伝えられるのかということを考える毎日でした。それまでは、文章を書く機会もあまり無かったので、この時期は本当に相手に伝わる文章を書く力というのが鍛えられたと感じています。県民の方の感覚もわかりますし、皆さんにもぜひ一度は勤務してもらいたい所属ですね。

◎ 副主幹として部局間の調整を担う立場に

東日本大震災後、生活環境部(現在の環境エネルギー部)に異動となり、副主幹を経験しました。震災直後だったということもあり、震災関連の質問が議会でも多く

出され、答弁の数の多さはおそらく歴代1位だったのではないかと思います。

最近、女性で副主幹になっている方も多いですよね。副主幹は、他の部局との調整を行う役割でもありますが、部局全体のことを考えて、言うべき意見はきちんと主張する必要があります。

副主幹として、失敗しながら様々な経験をすることで、調整を行う際に、「誰かが我慢すればいいのではなく、もっと大きな視点で課題の本質は何なのかを考える」という、「原点を見失わずに対応していくこと」の大切さに気付くことができたと感じています。

この頃は非常に慌ただしい時期でしたが、当時の上司の仕事に対する姿勢がとても印象に残っています。その方は、ものすごく忙しい中であって、資料等が少し遅れるようなことがあっても部下に文句を言ったり、催促をしたりすることはありませんでした。また、資料を持っていくと必ず「ありがとう」と言ってくれました。

その上司と話をしていた時に「部下が『やってくれること』を『当たり前だ』とは思っていないから」とさっぱりと仰ったことがありました。部下に対しても感謝の気持ちを忘れない方でしたね。そういった「働くことに対する姿勢」から私自身も学ぶことが多かったと思います。



《くらし安心課での打合せ》

◎ 後に続く人たちのために

さまざまな方にご迷惑をかけながら、そして、お世話になりながらここまで来たという想いがあります。

働き始めた頃は「女性だから」と任される業務が限定されたり、県民の方からの電話でも「男性を出して」と言われたりすることもありましたが、「せっかく採用してもらったのだから『この人を採用してよかった』と思ってもらえるように頑張りたい」という想いがあったからこそ、そういう時期も乗り越えられたのかなと思います。「やっぱり女性はだめだね」と思われてしまうと、私の

後に働く女性が働きづらくなってしまうという気持ちもありました。私くらいの年代の女性は、少なからずそういうプレッシャーを感じながら頑張ってきた部分があるのかなと思います。



《関係団体の総会で知事挨拶を代読》

結婚、出産と仕事

結婚は26歳の時で第一子の出産は35歳の時でした。仕事での経験を積んでから出産したいという気持ちが強かったので、結婚してから出産まで期間が空く形になりました。今ではそのくらいの年齢で出産する人も珍しくありませんが、当時は20代後半で結婚や出産をする人が多かったので少数派でしたね。

第一子出産の2年後に2人目を出産しましたが、子育てに力が入り過ぎて流産しかけ、1か月ほど入院しました。しかもちょうど年度末の人事異動で異動するというタイミングでした。このような経験から、特に女性は出産や子育てで大変ということもあるので、出産や子育て中の方をサポートしたいという思いが強いですね。愚痴くらいはお聞きしますから、いつでもどうぞ。

◎ 「100%」を目指さない～子育てと仕事の両立のポイント～

「子育てと仕事を両立できるのだろうか」と不安に感じる人もいると思いますが、100%完璧にこなそうとするのではなく、良い意味で手を抜けるところは抜くということも必要だと思います。もちろん、最低限やらなければならないことはきちんとやる一方で、「やらないことはやらない」と割り切る気持ちも大事です。どこを割り切るかは人それぞれですね。それでも大変という状況に変わりはないと思いますから、家族や周りの人に協力してもらおうことも大切です。

また、仕事のために子どもを保育園や幼稚園等に預けて働くことに後ろめたさや抵抗感を感じる人もいますが、そんなふうを感じなくてもよいのではないでし

ょうか。かえて、預けて働くことがプラスになることもあります。子どもも自分なりに友達との繋がりを作ることになりますし、自立心が育つという一面もあるのではないかと思います。

私自身は、子どもと接する時間が限られていたということもあったので、接する時はできるだけふれあいの質を高めるように努めていました。

今は趣味のお菓子作りをする時間もありますが、子どもが小さい頃はなかなかそういった時間を作れませんでした。子育て中でも自分の時間をつくって、例えば、わずかな時間であっても、たまには素敵なカップでお茶を飲んでみる等、リフレッシュできる時間があると全然違いますよね。



《手作り菓子とお気に入りの食器で至福のティータイム》

◎ 出産や子育ては「皆に関わりのあること」

「出産」というと、「女性の問題」と捉えられがちですが、「皆に関わりのあること」として考えることが大事ではないでしょうか。職場全体として、「出産」「子育て」を「皆のこと」として捉える雰囲気広がっていったらと思っています。また、子育て中は、職場にも迷惑をかけてしまうことがあるのは仕方ありません。でも、それを当然の権利と思わずに、できるだけことはやっとうえて、「お互いさま」の気持ちを持っていてほしいと思

ます。子どもが大きくなってくると、今度は自分の後に出産した人を支える機会も出てきます。若い人たちも、忙しいからといって結婚や出産に消極的にならず、自分の人生を大事にしてもらいたいと思います。子育てに限らず、これからは介護を行う人も増えてくるでしょうし、それ以外にも様々な事情を抱えながら仕事をしている職員もいると思いますので、皆が働きやすいように、「お互いさま」の気持ちで仕事をしていけたらいいですね。

ロールモデル集読者へのメッセージ

これは男女限らずですが、一生懸命頑張っていれば「見ていてくれる人は、ちゃんと見ていてくれる」と思います。頑張ることで、「応援してくれる人」を増やす努力も重要だと思えますね。

また、若い時は苦勞をいとわず仕事をする事で後々役に立つことがたくさんありますし、体力的にもそれだけのことが可能です。あまり無理をはいけません、若いうちにいろんな経験を積んでおくというのは自分の限界を広げ、自信につなげるためにも大切だと感じています。私自身、「もっと若いうちにこういう経験しておけたらよかったなあ」と思うこともよくあります。困難な時は自分が成長するチャンスでもあります。

最後になりますが、「効率」を求めることが大事なこともあります。一見「無駄」な寄り道や回り道をする事で、見聞を広める姿勢ももっていてほしいですね。「人としての『幅』」を広げること、交友範囲を広げることで、様々な視点で物事を考えられる包容力のある県職員になってもらえたらと思っています。

「女性職員として初めて」という仕事も数多く経験されてきた佐藤課長。

子育てや仕事の両立に悩んでいる方も、佐藤課長のお話から、何か解決のヒントを得られるかもしれません。

